

- 1 気胸を合併しやすいのはどれか。
- 癌性胸膜炎
 - 肺高血圧症
 - 肺胞蛋白症
 - 過敏性肺臓炎
 - 肺リンパ脈管筋腫症
- 2 尿酸排泄を促進するのはどれか。
- フロセミド
 - コルヒチン
 - サイアザイド
 - プロベネシド
 - アロプリノール
- 3 肺高血圧の存在を疑う心エコー検査所見はどれか。2つ選べ。
- 右室の拡大
 - 僧帽弁逆流
 - 心のう液貯留
 - 下大静脈径の縮小
 - 心室中隔の平坦化
- 4 アミロイドーシスに伴う臓器障害の組合せで正しいのはどれか。2つ選べ。
- 心臓 ————— 拡張型心筋症
 - 肝臓 ————— 肝細胞癌
 - 腎臓 ————— ネフローゼ症候群
 - 消化管 ————— ポリポーシス
 - 末梢神経 ————— ポリニューロパチー
- 5 甲状腺髄様癌で正しいのはどれか。
- 若年に好発する。
 - 化学療法が奏功する。
 - 甲状腺癌の10%を占める。
 - Sipple症候群に含まれる。
 - びまん性甲状腺腫を呈する。
- 6 女性の老化に関連した記述で正しいのはどれか。
- 9割以上が更年期障害で悩むことになる。
 - 閉経すると更年期障害は急激に改善する。
 - 萎縮性膣炎の方が骨粗鬆症よりも早い時期に発症する。
 - 更年期に過多月経となることはない。
 - 脂質代謝異常と閉経には関連がない。
- 7 正しい組合せはどれか。2つ選べ。
- ソマトスタチノーマ ————— 胆石
 - インスリノーマ ————— 糖尿病
 - ガストリノーマ ————— 低酸症
 - グルカゴノーマ ————— 低血糖発作
 - WDHA症候群 ————— 低カリウム血症
- 8 起立性低血圧がみられないのはどれか。
- 頸髄空洞症
 - 褐色細胞腫
 - Shy-Drager症候群
 - 糖尿病性ニューロパチー
 - 原発性アミロイドニューロパチー
- 9 特異的な染色体異常がみられないのはどれか。
- 慢性骨髄性白血病
 - 成人T細胞性白血病
 - 急性骨髄性白血病 (FAB分類:M2)
 - 急性骨髄性白血病 (FAB分類:M3)
 - 急性骨髄性白血病 (FAB分類:M4)
- 10 特発性間質性肺炎について正しいのはどれか。
- 湿性咳嗽が初発症状である。
 - 聴診にてcoarse cracklesが聴取される。
 - 動脈血ガス分析でPaCO₂の増加を示す。
 - 呼吸機能検査で残気量(RV)は上昇する。
 - 胸部CTでhoney comb lungが特徴である。

11 原発性アルドステロン症の血液検査で**低値**を示すのはどれか。2つ選べ。

- a カリウム
- b グルコース
- c ナトリウム
- d レニン活性
- e カテコールアミン

12 発疹チフスの病原体はどれか。

- a マイコプラズマ
- b クラミジア
- c スピロヘータ
- d リケッチア
- e ウイルス

13 閉塞性（単純性）イレウスで、**みられない**所見はどれか。

- a 鼓 腸
- b 蠕動不隠
- c Wahl徴候
- d 金属性腸雑音
- e 排ガスの停止

14 脳の白質が障害されるのはどれか。2つ選べ。

- a 多発性硬化症
- b 結節性硬化症
- c Parkinson 病
- d Huntington 病
- e 急性散在性脳脊髄炎

15 成熟嚢胞性奇形腫について、**誤っている**のはどれか。

- a 良性卵巣腫瘍の中で約 20-30 %を占める。
- b 好発年齢は約 20-30 歳代である。
- c 両側性の発生は約 20-30 %である。
- d SCCが高値をきたすことは約 20-30 %である。
- e 稀に脳炎を引き起こすことがある。

16 境界性パーソナリティ障害に見られるのはどれか。

- a 猜疑心
- b 見捨てられ不安
- c 誇大的な自己像
- d 良心の呵責の欠如
- e 奇異な信念や魔術的思考

17 高熱をきたしやすい疾患はどれか。2つ選べ。

- a 精巣上体炎
- b 急性膀胱炎
- c 急性腎盂腎炎
- d 慢性前立腺炎
- e 慢性糸球体腎炎

18 大腸憩室症について正しいのはどれか。

- a 加齢とともに減少する。
- b 常染色体優性遺伝である。
- c 日本人は左側結腸に多い。
- d 合併症として大量出血がある。
- e 放置すると癌化の危険性がある。

19 収縮性心膜炎に見られる所見はどれか。2つ選べ。

- a 速 脈
- b 心膜ノック音
- c de Musset徴候
- d Kussumaul 兆候
- e 心尖拍動の左方偏位

20 アミロイドアンギオパシーが高齢者に引き起こす主な脳血管障害はどれか。

- a ラクナ梗塞
- b 脳動脈解離
- c 皮質下出血
- d くも膜下出血
- e 静脈洞血栓症

21 表のような所見で、慢性炎症による二次性貧血に認められるのはどれか。

- a ①
b ②
c ③
d ④
e ⑤

	MCV	MCHC	Fe	TIBC	フェリチン
①	高値	正常	高値	低値	高値
②	正常	正常	高値	低値	高値
③	低値	低値	低値	低値	高値
④	低値	低値	高値	低値	高値
⑤	低値	低値	低値	高値	低値

22 アスピリン喘息について正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 男性より女性に多い。
b 成人喘息の約1%程度の頻度といわれている。
c インドメタシンの湿布薬の使用は禁忌である。
d 薬剤服用後、通常5から6時間以降で発作を起こすことが多い。
e ステロイド薬による発作の誘発・悪化は、コハク酸エステル型よりリン酸エステル型が多い。

23 Sheehan症候群でみられるのはどれか。2つ選べ。

- a 多毛
b 頰脈
c 高血圧
d 無月経
e 低体温

24 代謝性アシドーシスをきたす疾患はどれか。

- a 慢性下痢
b 習慣性嘔吐症
c Bartter症候群
d 腎血管性高血圧症
e 原発性アルドステロン症

25 全身性エリテマトーデスの臓器と病変の組合せで誤っているのはどれか。

- a 皮膚———基底層の液状変性
b 心臓———非定型疣贅性心内膜炎
c 腎臓———Wireloop病変
d 関節———破壊性関節炎
e 肺———胸膜炎

26 直腸癌の術式で肛門を温存する術式はどれか。

- a 低位前方切除術
b 骨盤内臓全摘術
c Hartmann手術
d 腹会陰直腸切断術
e 仙骨会陰直腸切断術

27 新生児臍ヘルニアで正しいのはどれか。

- a 重症な全身奇形を伴うことが多い。
b 新生児期に手術を行うことが多い。
c 早産児に比べ、正期産児に圧倒的に多い。
d 啼泣時腸管が脱出し、皮下に腫瘤として触れる。
e 胎児期の生理的ヘルニア還納障害が主な原因である。

28 関連の最も少ない組合せはどれか。

- a CA125 ———卵巣漿液性嚢胞腺癌
b CA19-9 ———成熟嚢胞性奇形腫
c CEA ———卵巣粘液性嚢胞腺癌
d hCG ———卵巣卵黄嚢腫瘍
e SCC ———子宮頸癌

29 産業中毒物質と健康への影響の組合せで正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 塩化ビニル———肝血管肉腫
b ベリリウム———末梢神経炎
c 亜鉛———金属熱
d 無機水銀———視野狭窄
e ベンゼン———視神経障害

30 頬骨折で見られない症状はどれか。2つ選べ。

- a 鼻出血
- b 知覚障害
- c 開口障害
- d 咬合不全
- e 顔面神経麻痺

31 急性化膿性膝関節炎の治療について誤っているのはどれか。

- a 局所の安静
- b 抗菌薬の投与
- c 病巣搔爬
- d 人工膝関節置換術
- e 持続洗浄療法

32 非電離放射線による障害はどれか。

- a 下痢
- b 不妊
- c 白内障
- d 皮膚炎
- e リンパ球減少

33 ナルコレプシーでみられるのはどれか。3つ選べ。

- a いびき
- b 睡眠麻痺
- c 日中の眠気
- d 情動脱力発作
- e 入眠時の下肢のむずむず感

34 組合せで正しいのはどれか。

- a うっ滞性皮膚炎———下肢動脈瘤
- b 自家感作性皮膚炎———紙幣状皮膚
- c 薬剤性過敏症症候群———HHV-9 再活性化
- d 慢性GVHD ———扁平苔癬
- e Sweet病 ———好酸球増加

35 喉頭癌について正しいのはどれか。

- a 男性と女性の発生頻度はほぼ同じである。
- b 声門癌は喉頭癌全体の約 30 %を占める。
- c 声門癌の予後は声門上癌より良好である。
- d 声門癌の初発症状は嚥下困難が最も多い。
- e 声門癌の予後は下咽頭癌とほぼ同等である。

36 前立腺肥大症の治療法について正しいのはどれか。

- a α 遮断薬
- b β 遮断薬
- c Ca拮抗薬
- d 密封小線源療法
- e 根治的前立腺全摘除術

37 50歳の男性。視覚異常を主訴に来院した。「今朝、新聞を読んでいたら、突然、左側に光が走るように感じた。眼を動かすともやもやすものがみえていたが、左眼に多く見えるようになった」と言う。

述べられている症状はどれか。2つ選べ。

- a 夜盲
- b 飛蚊症
- c 光視症
- d 変視症
- e 眼精疲労

38 33℃でよく増殖するのはどれか。2つ選べ。

- a RSウイルス
- b ライノウイルス
- c コロナウイルス
- d エンテロウイルス 70 型
- e パラインフルエンザウイルス

39 妊娠 30 週の妊婦で、喀痰塗沫陽性の肺結核の治療として適切なのはどれか。

- a イソニアジド単独
- b イソニアジド+リファンピシン
- c イソニアジド+リファンピシン+エタンブトール
- d イソニアジド+リファンピシン+ストレプトマイシン
- e イソニアジド+リファンピシン+エタンブトール+ピラジナミド

40 羊水過多の原因となるのはどれか。2つ選べ。

- a 鎖 肛
- b 食道閉鎖
- c 妊娠糖尿病
- d 妊娠高血圧腎症
- e 子宮内胎児発育遅延

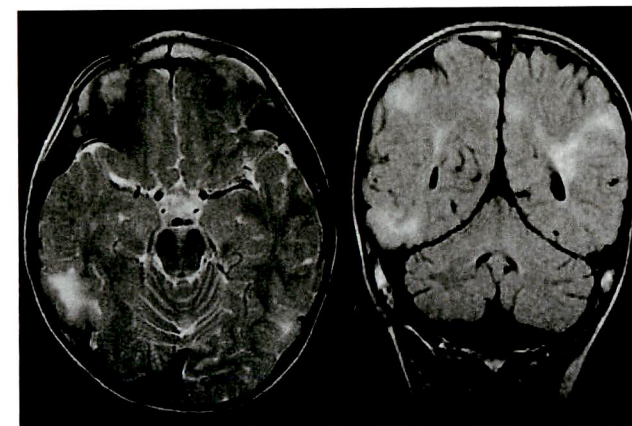
41 7歳の女兒。けいれんを主訴に受診した。胎児期の心臓超音波検査にて、心房内に多発する横紋筋腫を指摘されていた。受診時の皮膚所見と、3歳時の頭部MRIを示す。

診断はどれか。

- a 結節性硬化症
- b 神経線維腫症
- c 神経皮膚黒色症
- d Von Hippel-Lindau 病
- e Sturge-Weber 症候群



皮膚所見



頭部MRI

- 42 17歳の男子。7日前からの発熱および咽頭痛を主訴に来院した。両側口蓋扁桃は発赤、腫脹し、両側頸部リンパ節腫大と肝脾腫とを認める。皮疹はみられない。現症：体温 38.7℃。血液所見：白血球 10,200（リンパ球 56%、異型リンパ球 18%）。

この疾患にみられるのはどれか。2つ選べ。

- a 感音難聴
- b 眼瞼浮腫
- c 急性睇炎
- d Koplik斑
- e 上咽頭の白苔

- 43 49歳の女性。2年前に外傷で近医を受診した際に血圧の高値を指摘された。朝より重いものを移動する作業をしていたところ、激しい胸痛があり、背部～腰部に痛みを伴い左足が重くだるい感じが持続するため来院した。

身長 161 cm、体重 50.0 kg。血圧 180/100 mmHg。心雑音なく、呼吸音に異常はない。

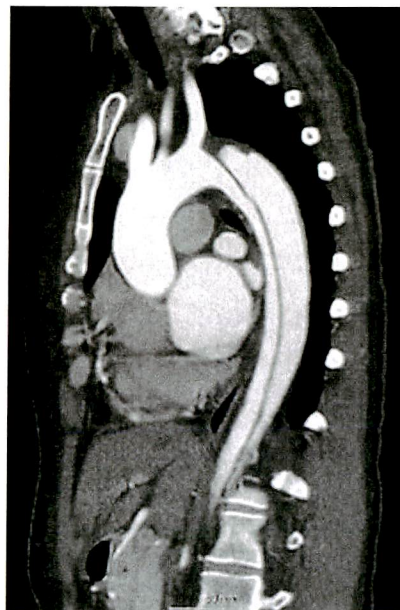
血液所見：赤血球 484 万、Hb 14.2 g/dl、Ht 44%、白血球 7,300。

生化学所見：総蛋白 6.6 g/dl、アルブミン 3.8 g/dl、クレアチニン 1.06 mg/dl、AST 36 IU/l、ALT 13 IU/l、LDH 350 IU/l（基準 176～353）、CK 32 IU/l（基準 10～40）。

胸部造影CTの画像を示す。

上記症例の急性期の治療について適切なのは以下のうちどれか。

- a 安静と降圧療法
- b 緊急大動脈置換術
- c 待機的大動脈置換術
- d リハビリテーション
- e 大動脈内バルーンパンピング



胸部造影CT

- 44 妊娠 36 週の妊婦。妊娠がわかってから胎児に障害が出ることを心配して気管支喘息の治療薬である吸入ステロイド薬と長時間作用型吸入 β 刺激薬の使用を控えていた。6 週間前より夜間および早朝に咳嗽を自覚するようになった。その後徐々に悪化。昨晩は咳嗽が一晩中続き、起坐位でなければ息苦しかった。

投与する薬剤として誤っているのはどれか。

- a 経口ステロイド薬
- b 吸入ステロイド薬
- c エピネフリン皮下注
- d 短時間作用型吸入 β 刺激薬
- e 長時間作用型吸入 β 刺激薬

- 45 56歳の男性。右足の疼痛を主訴に来院した。疼痛は昨夜就寝時に出現し、痛みのため歩行も困難となった。45歳時に尿路結石の既往がある。身長 170 cm、体重 91 kg。体温 36.4℃。血圧 152/86 mmHg。右足第1趾の中足趾関節（metacarpophalangeal関節）周囲の発赤と疼痛を認める。白血球 9,700、赤血球 470 万、Hb 15.4 g/dl、赤沈 32 mm/1 時間、CRP 6.4 mg/dl、尿素窒素 18.5 mg/dl、クレアチニン 0.94 mg/dl、尿酸 9.2 mg/dl（基準 3.7～7.0）。

まず最初に投与すべき薬剤はどれか。

- a プロベネシド
- b アロプリノール
- c セフェム系抗菌薬
- d ベンズプロマロン
- e 非ステロイド系抗炎症薬

46 50歳の男性。悪寒戦慄と激しい左腰部痛を主訴に来院した。左尿路結石をいわれている。体温 38.2℃。血圧 146/90 mmHg。脈拍 100/分、整。左腰部に叩打痛を認める。尿所見：蛋白(±)、潜血+、沈渣に白血球 50-100/1視野。血液所見：WBC 13,800、血液生化学所見：アルブミン 3.6 g/dl、尿素窒素 28 mg/dl、クレアチニン 1.0 mg/dl、免疫学所見：CRP 12.3 mg/dl。本例の腹部造影CT所見を示す。

この疾患について誤っているのはどれか。

- a 造影CTではring signを呈する。
- b 最も多い起炎菌は黄色ブドウ球菌である。
- c 初期治療は抗菌薬およびドレナージである。
- d MRIではGerota筋膜の肥厚が観察される。
- e 排泄性尿路造影では腎盂・腎杯の変形が認められる。

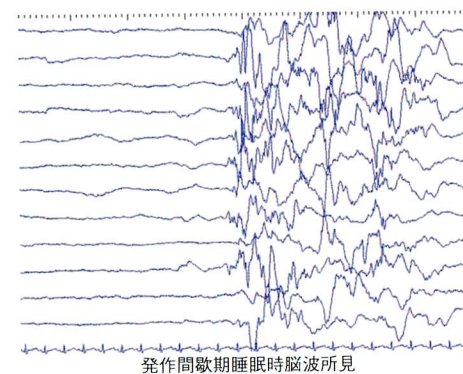


腹部造影CT所見

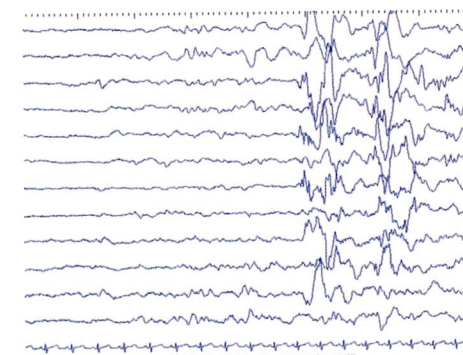
47 生後2週間の男児。顔面を含み四肢を強直させる動き（約5秒間）を1～3回/日の頻度で、睡眠時、覚醒時にかかわらず繰り返した。発作間歇期睡眠時脳波所見と発作間歇期覚醒時脳波所見を示す。

診断はどれか。

- a 点頭てんかん
- b 早期ミオクロニー脳症
- c 覚醒時大発作てんかん
- d 早期乳児てんかん性脳症
- e 良性家族性新生児けいれん



発作間歇期睡眠時脳波所見



発作間歇期覚醒時脳波所見

48 48歳の男性、無職。20歳台後半から習慣飲酒を認めるようになり、徐々に酒量が増加。10年前から毎晩、焼酎を5～6合程度飲んでいる。朝から飲酒することも多くなり、会社も休みがちになっていた。その頃より手指振戦も出現していた。嘔気、倦怠感、食欲低下が悪化したため総合病院内科を受診。肝機能障害が著明なため、即日、入院となった。入院後より、全身の振戦、発汗が出現。本日、妻と病院の売店に行った際に、数10秒間の強直間代性けいれんを認めた。頭部CT、脳波を施行したが、異常所見は認めなかった。また、これまでけいれん発作の既往はないという。2時間ほど意識はほぼ清明になったが、手指振戦と発汗を認めていた。

治療に適切な薬物はどれか。

- a ジアゼパム
- b フェニトイン
- c カルバマゼピン
- d フェノバルビタール
- e バルプロ酸ナトリウム

49 36歳の男性。嚥下困難を主訴に受診した。3日前より咽頭痛が出現し、近医で抗菌薬を処方され内服していたが、改善しなかった。開口障害も出現した。現症：体温38.7℃。脈拍86/分、整。血圧136/82 mmHg。検査所見：血液所見：白血球10,600（好中球80%、好酸球2%、単球6%、リンパ球12%）。免疫学所見：CRP 17.5 mg/dL。咽頭所見を示す。

治療として適切でないのはどれか。

- a 安静
- b 補液
- c 抗菌薬投与
- d 利尿薬投与
- e 咽頭切開排膿



咽頭所見

50 49歳の男性。2か月前から夜間から早朝、就寝時に冷汗を伴う胸部圧迫感を自覚するようになった。近医で冠動脈CT検査を受けたが有意狭窄は認められなかった。発作の持続時間は5から10分程度で、日中労作時に胸部症状の出現は見られない。発作時のホルター心電図を示す。

正しいのはどれか。

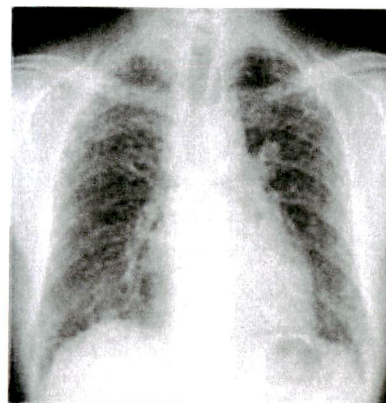
- a 喫煙との因果関係は少ない。
- b 経皮的冠動脈形成術の適応である。
- c エルゴノビン投与が治療に有効である。
- d カルシウム拮抗剤が治療に有効である。
- e アセチルコリン投与が治療に有効である。



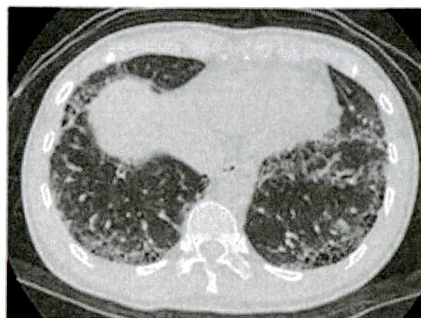
ホルター心電図

51 60歳の男性。労作時呼吸困難を主訴に来院した。1年前から咳嗽を自覚。6か月前から階段昇降時の呼吸困難を自覚するようになり、改善しないため受診した。喀痰はない。喫煙歴:40本/日、44年間。体温36.6℃。呼吸数18/分。脈拍80/分、整。血圧142/84 mmHg。安静時空気吸入下SpO₂ 94%、6分間歩行後空気吸入下SpO₂ 86%。両背部下肺野でfine cracklesを聴取。血液所見:赤血球460万、白血球7,400(桿状核好中球3%、分葉核好中球52%、好酸球2%、リンパ球42%)。CRP 0.2 mg/dl。KL-6 880 U/l(基準 500以下)。

胸部エックス線写真と胸部単純CTを示す。



胸部エックス線



胸部単純CT

気管支肺胞洗浄液細胞分画比率として正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 好酸球—————1%
- b リンパ球—————10%
- c 好塩基球—————20%
- d 好中球—————30%
- e 肺胞マクロファージ—————50%

52 62歳の女性。2週間前からの目のかすみを主訴に来院した。1年前より全身倦怠感、2か月前より階段昇降時の息切れを自覚している。20年前に健康診断で糖尿病と診断され、15年前より経口血糖降下薬を内服していた。父親が糖尿病である。身長153 cm、体重52 kg。脈拍88/分、整。血圧166/98 mmHg。意識は清明。眼瞼結膜は蒼白であるが、眼球結膜に黄染は認めない。下腿に浮腫を認める。尿所見:蛋白3+、糖1+、ケトン体(-)、潜血反応(-)。血液所見:赤血球240万、Hb 8.0/dl、Ht 25%、白血球7,200、血小板18万。血清生化学所見:随時血糖値165 mg/dl、HbA1c 7.2%(JDS値:基準4.3~5.8)、総蛋白5.5 g/dl、アルブミン2.4 g/dl、尿素窒素68 mg/dl、クレアチニン5.7 mg/dl、AST 32単位、ALT 24単位、ALP 420単位(基準260以下)、アミラーゼ220単位(基準37~160)。

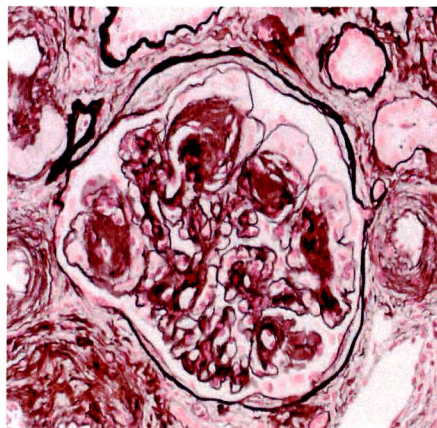
食事療法で正しいのはどれか。

	エネルギー (kcal/日)	塩分 (g/日)	タンパク質 (g/日)
a	1200	6	40
b	1200	6	60
c	1200	8	40
d	1400	6	40
e	1400	8	60
f	1800	6	40
g	1800	6	60
h	1800	8	60

53 58歳の男性。両下肢のむくみを主訴に来院した。20年前に糖尿病と診断され、食事指導を受けたことがある。2年前の健康診断で尿糖と尿蛋白を指摘された。6か月前より両下肢のむくみを自覚していた。身長168 cm、体重78 kg。脈拍76 /分、整。血圧154/92 mmHg。尿所見：蛋白3+、糖+、潜血(-)、沈渣に異常はない。血清生化学所見：総蛋白5.8 g/dl、アルブミン2.8 g/dl、尿素窒素28 mg/dl、クレアチニン1.3 mg/dl、空腹時血糖135 mg/dl、HbA1c 7.7% (基準4.3-5.8)。腎生検PAM染色標本(400倍)を示す。

行うべき治療はどれか。2つ選べ。

- a 高蛋白食
- b 免疫抑制薬投与
- c 血糖コントロール
- d 副腎皮質ステロイド薬投与
- e アンジオテンシン受容体拮抗薬投与



腎生検PAM染色標本

54 28歳の男性。1週間前から昨日まで東南アジアに旅行した。現地ではよく蚊にさされた。帰国後より突然の38℃以上の発熱が出現した。その後全身倦怠感、頭痛、全身痛、関節痛が出現したため来院した。身長172cm、体重65kg。意識清明。体温38.5℃、呼吸回数20回/分。脈拍96回/分、整。血圧112/74 mmHg。口腔内乾燥と皮膚ツルゴール低下があり、顔面紅潮と結膜充血、体幹から胸部・四肢にかけて発疹を認めた。出血斑は認めない。

血液検査所見：白血球2,600、Hb 14.6 g/dl、血小板9.4万、総蛋白7.6 g/dl、アルブミン3.5 g/dl、肝機能正常、腎機能正常であった。

行うべき初期対応はどれか。3つ選べ。

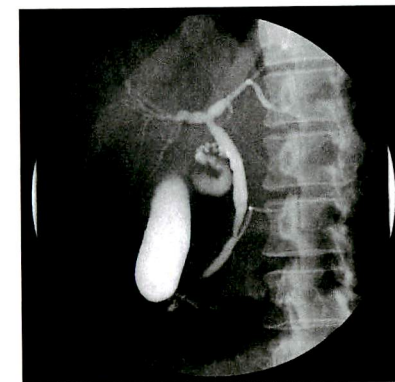
- a 輸液
- b アセトアミノフェンの投与
- c 広域ペニシリンの投与
- d クロロキンの投与
- e 分離・同定による病原体の検出

55 44歳の女性。上腹部痛を主訴に近医を受診したところ腹部超音波検査で胆道系の異常を指摘され来院した。ERCPを示す。腹部は平坦で腫瘍は触知しない。

血液所見：赤血球400万、Hb 13.0 g/dl、白血球6,000、血小板22.5万。血液生化学所見：総ビリルビン0.9 mg/dl、AST 21 IU/l、ALT 16 IU/l、アミラーゼ80 IU/l (基準37~160)、CA19-9 4.1 U/ml (基準37以下)。ERCP時に採取した胆汁中アミラーゼ36,082単位。

適切な手術法はどれか。

- a 脾空腸吻合術
- b 脾頭十二指腸切除術
- c 経皮経肝胆道ドレナージ術
- d 胆嚢・胆管切除、胆道再建術
- e 総胆管切開、Tチューブドレナージ術



ERCP

56 日齢28の男児。新生児期からの黄疸が消失せずに来院した。出生体重2,900 g、母乳栄養、経過中に発熱はなく哺乳は良好であった。体重4,200 g、肝臓を2 cm触知し、弾性軟、辺縁はやや鈍。脾臓は触知しなかった。便のビリルビン反応は陽性。赤血球480万、Hb 12.4 g/dl、網赤血球1% (基準0.3~2.0%)、血液像に赤芽球は認めない。総ビリルビン5.8 mg/dl (基準0.3~1.2)、直接ビリルビン4.9 mg/dl (基準0.4以下)、AST 80単位 (基準40以下)、ALT 70単位 (基準35以下)。

最も考えられる診断はどれか。

- a 母乳性黄疸
- b 新生児肝炎
- c 胆道閉鎖症
- d 原発性胆汁性肝硬変
- e 遺伝性球状赤血球症

- 57 12歳の女児。腹痛を主訴に来院。この患者の①T2強調MRI画像と②外陰部の写真を示す。
最初に行う処置として適切なものはどれか。

- a 浣腸
- b 大腸鏡
- c 膀胱鏡
- d 処女膜切開
- e 子宮頸部円錐切除術



①T2強調MRI画像



②外陰部の写真

- 58 中学1年の男児。不登校を主訴に精神科外来を受診。小学校低学年の頃から国語や算数などの学習習得が全般的に困難で、小学6年で掛け算の九九をようやく覚えた。小学2年の頃から授業中の落ち着きのなさが目立ってきた。休み時間はクラスメートと仲良く遊んでいた。中学校に進み、忙しい生活に追いつけず学校を休むようになった。

診断はどれか。

- a 学習障害
- b 適応障害
- c 広汎性発達障害
- d 精神遅滞（知的障害）
- e 注意欠陥多動性障害

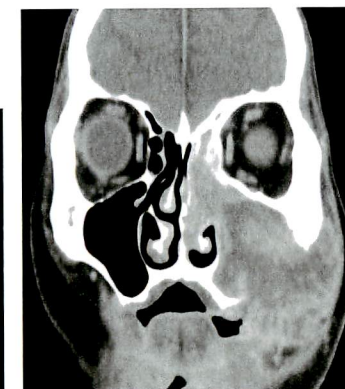
- 59 78歳の男性。1か月前から左頬部の腫脹を認め、鼻出血も繰り返すようになったため受診した。
副鼻腔CTを示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 上顎洞癌
- b 鼻前庭嚢胞
- c 菌性上顎洞炎
- d 副鼻腔真菌症
- e 術後性上顎嚢胞



副鼻腔CT

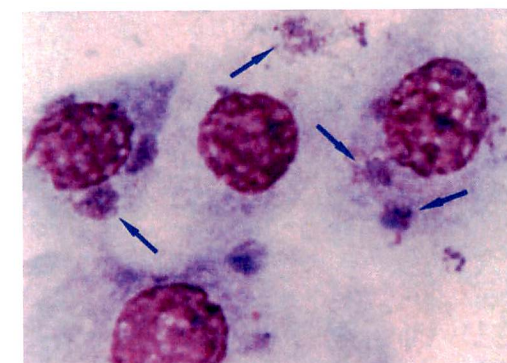


副鼻腔CT

- 60 20歳の男性。1週間前から両眼が充血し、眼脂が多いことを主訴に来院した。眼球結膜、眼瞼結膜とも充血し、眼瞼結膜には濾胞を認める。検査中も黄白色の粘性の眼脂を認める。眼脂の塗抹May-Giemsa染色標本を示す。

最も考えられるのはどれか。

- a アレルギー性結膜炎
- b ウイルス性結膜炎
- c クラミジア結膜炎
- d 細菌性結膜炎
- e 真菌性結膜炎



塗抹May-Giemsa染色標本

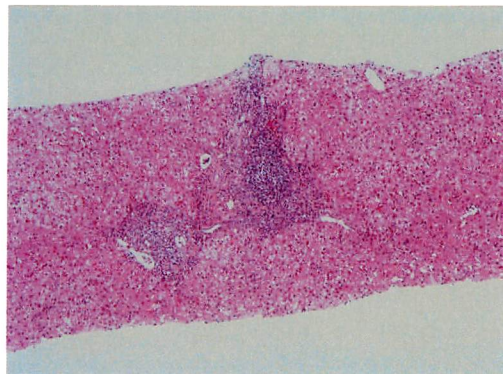
61 48歳の男性。健診で肝障害を指摘され来院した。自覚症状はない。20年前に交通外傷にて輸血を受けている。

飲酒歴：ビール 350 ml/日、約 10 年。身長 170 cm、体重 63 kg。眼球結膜に黄疸なし、眼瞼結膜に貧血なし。胸部所見に異常なし。肝を正中線上で 1 横指触知する。脾腫なし。腹水なし。下肢に浮腫なし。血液所見：赤血球 450 万、白血球 4,700、血小板 15 万。血液生化学所見：血清アルブミン 4.0 g/dl、総ビリルビン 1.0 mg/dl、AST 35 IU/l、ALT 40 IU/l、ALP 340 IU/l（基準値 350 以下）、 γ -GTP 80 IU/l（基準値 70 以下）、IgG 1,500 mg/dl（基準値 1,600 以下）、AFP 5 ng/dl（基準値 20 以下）、IgG-HA 抗体（+）、HBs抗原（-）、HBs抗体（+）、HCV抗体（+）。血中HCVウイルスの遺伝子型は 2 型（セログループ 2 型）で定量すると低ウイルス量であった。肝臓の超音波所見では著変を認めなかった。

肝生検組織所見を示す。

治療方針として正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 経過観察
- b エンテカビル投与
- c インターフェロン治療
- d 副腎皮質ステロイド投与
- e 特殊組成アミノ酸製剤投与



肝生検組織所見

62 21歳の男性。心雑音を指摘されていたが、精密検査を受けていなかった。2週間前から 38℃以上の発熱が持続していた。突然の右片麻痺と失語を認め、救急搬送された。来院時、脈拍 100 回/分、血圧 100/70 mmHg、体温 38.4℃、経皮的動脈血酸素飽和度 (SpO₂) 96% (room air) であった。来院時の心エコー図所見を示す。

直ちに行うべき処置を選べ。

- a 緊急手術
- b 血液培養
- c 解熱剤の投与
- d ヘパリンの投与
- e 抗生剤の静脈内投与



心エコー図所見

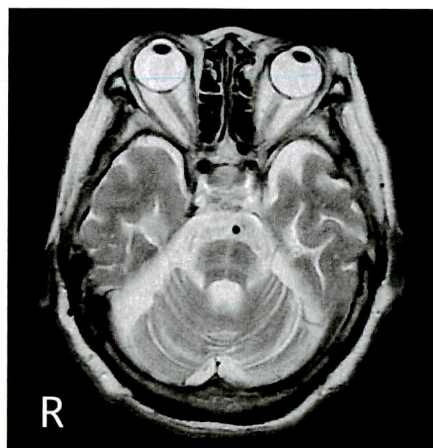


心エコー図所見

- 63 55歳の男性。50歳頃からふらつきが出現。症状は進行性であり、経過中に起立性低血圧、がんこな便秘、動作緩慢などの症状が出現している。脳MRI所見を示す。

この症例について正しいのはどれか。

- a 南日本に多い。
- b 多くは遺伝性である。
- c L-dopa製剤の効果は乏しい。
- d ステロイド療法が有効である。
- e 血清セルロプラスミンが低値である。

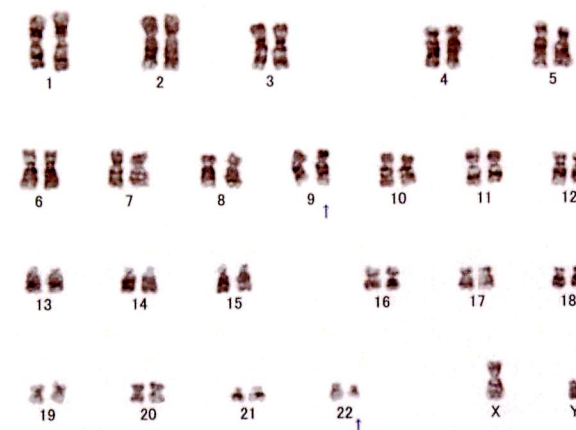


脳MRI所見

- 64 52歳の男性。6か月前に会社の健康診断で白血球増加を指摘されたが放置していた。1か月前より上腹部違和感が出現、改善しないため来院した。体温 36.4℃。脈拍 85/分、整。血圧 127/78 mmHg。表在リンパ節は触知しない。心音と呼吸音とに異常を認めない。左肋骨弓下に脾臓を6 cm触知する。血液所見：赤血球 380 万、Hb 10.8 g/dl、Ht 33%、白血球 56,000、血小板 47 万。血清生化学所見：総蛋白 7.2 g/dl、アルブミン 4.0 g/dl、尿素窒素 16 mg/dl、クレアチニン 0.7 mg/dl、尿酸 8.6 mg/dl、総コレステロール 156 mg/dl、総ビリルビン 1.0 mg/dl、AST 48 IU、ALT 32 IU、LDH 420 IU/l (基準 176~353)、FDP 9 μg/ml (基準 10 以下)、CRP 0.8 mg/dl。精査のため骨髓検査を施行した。図に骨髓染色体検査の核型を示す。

この疾患について適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 全トランス型レチノイン酸が有効である。
- b チロシンキナーゼ阻害薬が有効である。
- c 血清ビタミンB12は増加することが多い。
- d 播種性血管内凝固を合併することが多い。
- e AML-ETO融合遺伝子が形成されている。

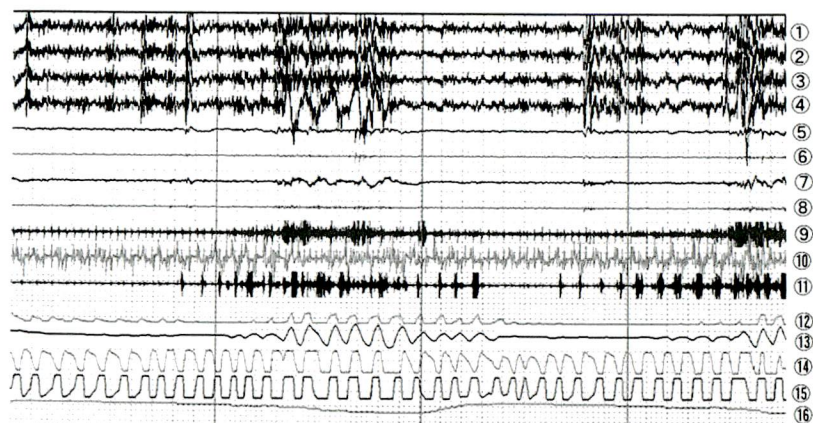


骨髓染色体検査の核型

65 52歳の男性。起床時熟睡感の欠如と日中の眠気を主訴に来院した。職場でも居眠りが多く、いらいらしやすくなったと感じている。妻によると3年前から睡眠中のいびきがひどくなり、最近ではしばしば呼吸が止まった状態になるという。身長168 cm、体重63 kg。視診上、扁桃肥大や軟口蓋低位、二重顎はないが、小顎症であった。抑うつ気分や不安感はなく、入眠障害や早朝覚醒あるいは夜間に足がむずむずする違和感はない。心電図検査にて明らかな異常を認めず、血中BNPの値も正常範囲内であった。夜間睡眠時ポリグラフの結果を示す。

本疾患について正しいのはどれか。

- a 側臥位での睡眠が推奨される。
- b 枕を高くすることが推奨される。
- c 心不全の治療が有用である。
- d 在宅酸素療法が有用である。
- e 口蓋垂口蓋咽頭形成術が有用である。



①、②、③、④：脳波 ⑤、⑥：眼電図（垂直方向） ⑦、⑧：眼電図（水平方向） ⑨：顎筋電図 ⑩：心電図
⑪：いびき音 ⑫：ETco2 ⑬：気流 ⑭：胸郭運動 ⑮：腹壁運動 ⑯：SpO2

夜間睡眠時ポリグラフの結果

66 72歳の男性。3日前から急激に口渇を自覚するようになり、排尿回数も増えたため来院した。夜間も排尿と口渇のため3～4回目が覚める。身長168 cm、体重56 kg。体温37.1℃。脈拍110/分、整。血圧116/72 mmHg。意識は清明。口腔粘膜は乾燥している。尿所見：比重<1.005（基準1.010～1.030）、蛋白（±）、糖（-）、潜血（-）、ケトン体（-）。血液所見：白血球4,200、赤血球530万、ヘモグロビン14.2 g/dl、ヘマトクリット49%、血小板29万。総蛋白8.2 g/dl、アルブミン4.8 g/dl、AST 12 IU/dl、ALT 26 IU/dl、LD 252 IU/l（基準180～230）、血糖値（随時）114 mg/dl、BUN 40 mg/dl、クレアチニン1.24 mg/dl、Na 149 mEq/l、K 3.9 mEq/l、Cl 114 mEq/l、浸透圧298 mOsm/kg・H₂O（基準276～292）、CRP 0.82 mg/dl（基準0.3以下）。

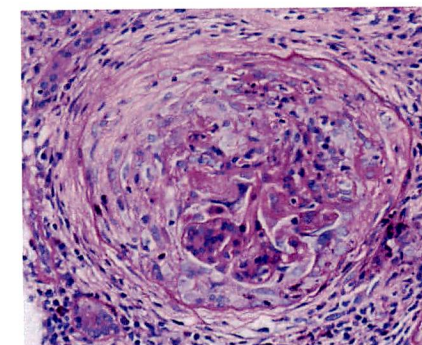
本症例の診断に有用な検査はどれか。

- a フロセミド立位試験
- b 高張食塩水負荷試験
- c 経口ブドウ糖負荷試験
- d デキサメサゾン抑制試験
- e Ellsworth-Howard 試験

67 65歳の女性。全身倦怠感を主訴に来院した。3週間前より微熱と倦怠感を自覚し、市販の総合感冒薬を内服していたが、症状の改善はなかった。体温37.4℃。脈拍86/分、整。血圧146/90 mmHg。意識清明、両下腿に浮腫を認めた。尿所見：蛋白2+、潜血3+、沈渣：赤血球30-40/1視野、白血球8-10/1視野、顆粒円柱陽性、赤血球円柱陽性。血液生化学所見：総蛋白6.4 g/dl、アルブミン3.0 g/dl、尿素窒素38 mg/dl、クレアチニン3.2 mg/dl。腎生検PAS染色標本（400倍）を示す。蛍光抗体法では免疫グロブリン、補体の局在を認めなかった。

この患者に見られるのはどれか。

- a ASO高値
- b 尿蛋白高選択性
- c 抗dsDNA抗体上昇
- d 抗好中球細胞質抗体陽性
- e 抗糸球体基底膜抗体陽性



腎生検PAS染色標本

68 28歳の女性。動悸、頭痛、呼吸困難を訴え来院した。6年前よりRaynaud現象、手指の腫脹、関節痛を認め近医で非ステロイド性抗炎症薬を処方されていた。半年前から労作時の息切れを自覚している。意識清明。身長162 cm、体重52 kg。体温36.2℃。脈拍72回/分。血圧112/68 mmHg。頸動脈怒張はない。II音の亢進を認め、両下肺野にfine cracklesを聴取する。血液所見：赤血球432万、Hb 13.4g/dl、白血球7,800（好中球80%、リンパ球15%、単球5%）、血小板28.7万。免疫学所見：抗核抗体2,560倍（基準40倍未満）、抗DNA抗体陽性、抗RNP抗体陽性、CH50 36 U/ml（基準25-45）

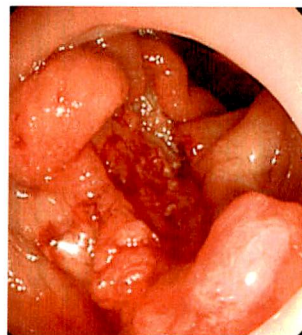
この疾患で予想される合併症はどれか。3つ選べ。

- a 悪性腫瘍
- b 間質性肺炎
- c 大動脈炎症候群
- d 肺高血圧
- e 無菌性髄膜炎

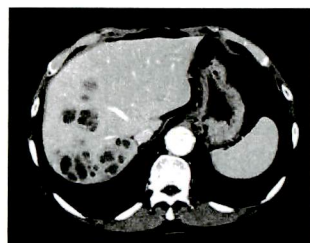
69 48歳の男性。数日間にわたり寛解と増悪を繰り返すイチゴゼリー状の粘血便を主訴に当院を受診した。大腸内視鏡ではS状結腸から直腸にかけてアフタ性の糜爛と粘膜浮腫、潰瘍を認めた。腹部CT検査では、右葉に限局した円形から楕円形の腫瘍陰影を多数認めた。既往歴に特記すべきことはないが、東南アジアへの渡航歴が数回ある。内視鏡像と腹部CT像を示す。

この疾患について正しいのはどれか。3つ選べ。

- a HIVの合併がよくみられる。
- b 血清抗体価の陽性率は95%以上である。
- c 内視鏡による直腸粘膜の生検診断の有用性が高い。
- d 治療は大腸切除および肝右葉切除が第一選択である。
- e 保存的治療は無効であり適応とはならない。



内視鏡像



腹部CT像

70 生後0日の新生児。在胎39週出生、出生直後で自発呼吸が微弱で筋緊張低下あり、脈拍120/分、明らかな外表奇形は認めない。

直ちに行う処置で不適切なのはどれか。

- a 保温
- b 体位保持
- c 胸骨圧迫
- d 皮膚の刺激
- e 口腔内吸引

71 28歳の1経妊1経産婦。現在18週2日。第1子（5歳）の通う保育園で、インフルエンザが流行している。家族内に罹患者はいない。

正しいのはどれか。

- a 母体の抗体は、胎児に移行しない。
- b インフルエンザワクチンは生ワクチンである。
- c 抗インフルエンザウイルス薬の催奇形性は強い。
- d 妊娠全期間を通じ、インフルエンザワクチンの接種は可能である。
- e 妊娠中インフルエンザに罹患しても、非妊時より心肺機能は悪化しにくい。

72 62歳の女性。1か月前から右足第1趾の皮膚潰瘍が出現。自宅にて処置を行っていたが治癒傾向を認めなかった。5日前より右足の腫脹と疼痛が出現。2日前より腫脹が下腿へ拡大したため受診。既往に糖尿病を認める。受診時の写真を示す。CT検査にて足底腱膜内にガス像を認めた。

適切でないのはどれか。2つ選べ。

- a 減張切開
- b 高圧酸素療法
- c 嫌気性菌培養
- d クリンダマイシンの投与
- e パンコマイシン塩酸塩の投与



受診時の写真 a



受診時の写真 b

73 65歳の女性。関節リウマチの診断で他院に通院中であった。メトトレキサートと生物学製剤による治療を行っていたが、右手関節の腫脹と疼痛は改善しなかった。3週間前から小指の伸展が困難となり、1週間前から環指の伸展が困難となったため受診した。受診時の手指伸展時の外観と、手関節単純エックス線像を示す。

この症例で最も考えられる病態はどれか。2つ選べ。

- a 後骨間神経麻痺
- b 総伸筋腱断裂
- c 脳梗塞
- d 脳出血
- e 固有小指伸筋腱断裂



受診時の手指伸展時の外観



手関節単純エックス線像

74 26歳の女性。自殺目的でイミプラミンの25 mg錠を60錠、フルニトラゼパムの2 mg錠を40錠服用したところを夫に発見され、およそ40分後に救急搬送された。

この患者の消化管除染法として第一選択はどれか。

- a 催吐
- b 胃洗浄
- c 腸洗浄
- d 下剤の投与
- e 活性炭の投与

- 75 18歳の女子。やせを心配した母親と来院した。15歳の頃に友人に太っているとと言われてから気に病んでいた。半年前から食事の量が減り、現在までに体重が15kg減少した。患者は活動的であり、まだ自分は太り過ぎていると考えている。4か月前からは月経がない。身長162cm、体重34kg。

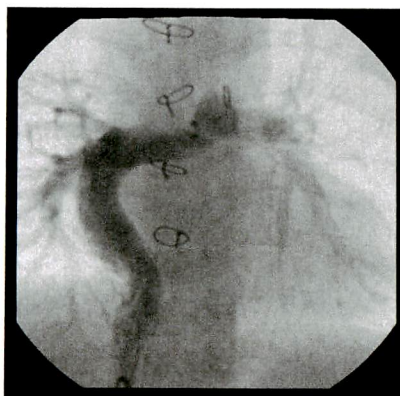
この疾患でみられるのはどれか。2つ選べ。

- a 多汗
- b 多毛
- c 徐脈
- d 低アルブミン血症
- e 高プロラクチン血症

- 76 2歳の男児。単心室と診断され、1か月、4か月、1歳4か月時に計3回の心臓手術を受けた。2歳時の血管造影を示す。

誤っているのはどれか。

- a 下大静脈造影である。
- b 肺血管抵抗は低い。
- c 上大静脈圧と下大静脈圧は等しい。
- d 上大静脈圧と肺動脈圧は等しい。
- e 下大静脈圧と右房圧は等しい。



2歳時の血管造影

- 77 53歳の女性。3か月前食事の後に、胸に食事がつかえる感じがあった。その後も違和感が続いたため、1か月後内科受診。血液検査、胸部CT検査など施行したが異常はなかった。しかし症状が続いたため、別の医療機関を3件受診。同様に検査をされるも、異常は見いだされなかった。このことに納得がいかないとのことで、精神科を受診。「異常が発見できなかったのは検査の仕方が悪いから」「ガンがあることが心配」と訴えている。

正しい対応はどれか。

- a 試験的開胸術を行う。
- b ステロイドを投与する。
- c 抗てんかん薬を投与する。
- d さらに詳細な検査をする。
- e 家族同席の診察の同意を得る。

- 78 70歳の女性。2か月前より瘙痒を伴う紅斑が全身に出現した。副腎皮質ステロイド薬を外用していたが改善せず、1週間より紅斑上に緊満性の水疱が多発してきたため来院。紅斑部の皮膚病理組織学的所見は、真皮乳頭層の著明な浮腫と多数の好酸球浸潤を伴う滲出性紅斑の像を呈した。臨床写真を示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a HHV-6 抗体価の上昇が認められる。
- b Tzanck 試験で棘融解細胞を認める。
- c 最少紅斑量は健常人より低値となる。
- d 薬剤リンパ球刺激試験が陽性になる。
- e 表皮基底膜部にIgGの沈着を認める。



臨床写真

79 41歳の女性。1年前より3か月に1回程度の頻度で耳閉塞感を自覚していた。3か月前にその症状に加えて30分程度持続する回転性めまいを認めた。本日朝から耳閉塞感を感じていたが、昼より耳閉塞感に加え、聴力が低下し、午後4時頃回転性めまいを認めたため、救急外来を受診した。

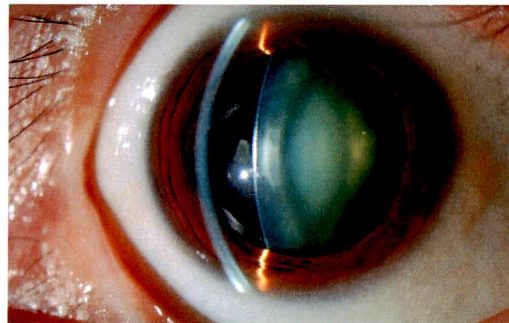
この疾患の特徴で正しいのはどれか。

- a 純回旋性眼振を認める。
- b リクルートメント現象陽性の聴力障害である。
- c 長期的には、めまい、聴力障害の予後はよい。
- d 聴力低下は、病初期から中高音部の障害である。
- e 強い回転性めまいは、連続して2日以上続くことが多い。

80 78歳の男性。右眼の視力低下を主訴に来院した。細隙灯顕微鏡検査を施行し、組織の混濁の程度から手術適応と判断した。前眼部を示す。

術前検査に必要な検査項目はどれか。2つ選べ。

- a 眼軸長
- b 角膜厚
- c 前房深度
- d 水晶体厚
- e 角膜曲率半径



前眼部

81 7歳の男児。右耳下部位の腫脹と圧痛があり受診した。耳介下と下顎部の間に大きさ3×5 cm大の腫瘍があり、触れるとわずかに皮膚に発赤はない。体温37.5度、咽頭発赤なし。扁桃腺腫大なし、発赤なし。腫瘍に沿って数個のリンパ節が触れる。血清アミラーゼ380 IU/l（基準37～160）CRP 1.5 mg/dl、ムンプスウイルスIgM抗体陽性。

この疾患について正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 成人は罹患しない。
- b 脳症の発症が見られる。
- c 抗ウイルス薬が有効である。
- d 顎下腺の腫脹を伴うことがある。
- e 病変部の周囲は化膿して治癒する。

82 42歳の女性。事務員として勤務している。2か月前から頭痛と四肢のしびれ感が頻繁に起きるようになり、頭痛が我慢できないときには市販の鎮痛薬を服用するが、効いた気がしない。夜の睡眠も次第に浅くなり、最近では早朝に目が覚めてしまうことが多い。食欲もなくなり、体重も5 kg減った。仕事のミスも増え、家事も以前ほどできなくなった。総合病院内科で精査した結果、身体的異常所見は認められなかった。

治療薬として適切なのはどれか。

- a 感情調整薬
- b ビタミンB12
- c メチルフェニデート
- d ベンゾジアゼピン系抗不安薬
- e 選択的セロトニン再取り込み阻害薬（SSRI）

83 38歳の男性。1週間前より咽頭痛と発熱を認めていた。市販の風邪薬を飲んでいたが、3日前から疼痛が増強し頸部の腫脹を認めるようになった。食事摂取が不能になり呼吸困難感も出現したため来院した。体温38.4℃。白血球18,900。CRP 13.6 (mg/dl)。頸部CT造影写真を示す。

治療はどれか。2つ選べ。

- a 切開排膿
- b 頸部郭清
- c 気管切開
- d 抗腫瘍薬
- e 放射線治療



頸部CT造影写真